心の花歌語事典

⑦ 事件・事故、災害、社会　加古陽選

日本の内外では多くの事件・事故や災害があり、歌人が歌にしてきた。
大きな出来事に沿って歴史を振り返る。

【明治（1868～1912年）】

思い出のごとく明治史を調べゆくこんなにも吾の中なる日本　佐佐木幸綱『群黎』1970年

コピーにはもはや耐え得ぬ稿本の明治の気迫信綱の願い　藤島秀憲『すずめ』2013年

いろり辺にうつむき眠る婆さまの膝をくずさず明治を生きる　前川多美江『水よ輝け』2017年

【関東大震災（1923年）】

地に坐り立木に寄れば矢継早に地震（なゐ）とよみきて地も木もゆらめく　木下利玄『一路』1924年

十重二十重（とへはたへ）火炎（くわえん）の波（なみ）におはれおはれいづちゆくべきわが身（み）ともしらず　九条武子『無憂華』1927年

天をひたす炎の波のただ中に血の色なせりかなしき太陽　佐佐木信綱『豊旗雲』1929年

【昭和（1926～89年）】

大正といふ青春を扼殺しだらだらと昭和は長し　伊藤一彦『青の風土記』1987年

昭和史の余白に生るる風の中われは五月のレモンを齧る　宇都宮とよ『地水説』1989年

昭和二十年八月十日と刻まれし祖父の命日指もて撫でつ　馬場昭徳『風の手力』2014年

【二・二六事件（1936年）】

濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ　斎藤史『魚歌』1940年

東京の雪の記憶を押しわけて軍靴の音の聞ゆる如月　築地正子『自分さがし』2004年

【戦後初の普通選挙／女性参政権行使（1946年）】

黙（もだ）しつつ底流らふる勁（つよ）さもて推移（おしうつ）る世をわれら動かさむ　五島美代子『丘の上』1948年

【ビキニ水爆実験／第五福竜丸被ばく（1954年）】